

【ないものがある町へ】 山口新聞 2016年5月5日掲載分

「まちづくり応援団えーる」の活動を始めて、早7年が過ぎた。自分が暮らす鹿野町で活動している人たちや、催されているイベントを紹介し、広報という形で応援していきたい。その思いから、この名前で活動することに決めた。

しかし、高校卒業までこの町の事は好きではなかった。遊ぶ場所もない、コンビニもない。働く場所もなければ、人もいない。何も「ない」町なのだと思っていた。

高校卒業後、北九州市の大学に進学した。思い出の母校や、お世話になった店がある北九州市は、今でも足しげく通うほど大好きだが、自分には都会の喧騒が合わなかった。福岡で就職したが、疲れ果てて仕事を辞め、町に帰って来た。そしてはっと気づいたのだ。

『「ない」ものが『ある』町なんだ』と。

春になれば耕された畑から土の匂いがする。夏になれば蝉の音がやかましく響いて、秋には山々が赤く染まり、冬にはうんと雪が降る。確かに「ない」ものは多いけれど、それ以上の、他の場所にはないものが「ある」。ないものがある町だったと、心の底から感じさせられた。この町のことをたくさんの人に知ってもらいたい…。それが活動を始めた、一番の理由である。

今、自分はこの町を好きだと、胸を張って言える。

「ない」ものが「ある」この町、そしてこの町でがんばる人たちへ、心からのエールを送りたい。



天神山公園から見下ろした鹿野の中心部⇒

【始まりはクジびき】 山口新聞 2016年5月12日掲載分

中学生まで、自分は他人に興味がなかった。クラスで誰が休んでいたかと聞かれても「知らない」と答えるし、皆で騒ぐより一人で遊ぶ方が好き。仲の良い友達はいたが、一人の時間の方が大事と思っていた。

徳山高校に進学し、そんな自分にいきなり試練が訪れる。応援団員を選ぶくじ引きに当たり、夏の甲子園予選まで応援団をしなければならなくなったのだ。どんなシゴキを受けるのだろう、そう考えるだけで気がめいった。予選が終わったら絶対にやめると誓って、嫌々ながらの応援団生活が幕を開ける。

汗だくになって練習を続ける日々を積み重ねて、ついに迎えた試合の日。焼けるような石段に裸足で立ち、水をかぶってもすぐに乾く暑さの中で、必死に大声を張り上げ、エールを送り続ける。全力で相手と戦う野球部の姿を見ていると、大声でがんばれと叫ばずにはいられなかった。9回裏、あと1点取らなければ負ける状況でも腐らずに戦う野球部の姿を見ていると、暑さに負けそうな体に力が戻ってくる。無我夢中だった。

結局野球部は負け、夏は終わり、そして応援団生活も終わるはずだった。しかし、応援団に残るか先輩に問われて、返した言葉は「残る」。理由はわからなかったが、とにかく応援団生活を終わりにしたくなかったのだ。

この思いの正体を知ったのは、大学進学後のことになる。



平成 29 年甲子園予選より。母校の団旗掲揚⇒

【応援団という哲学】 山口新聞 2016年5月19日掲載分

入学式当日、自分は北九州市立大学応援団に入団した。

入学式の朝まで、応援団に入る気はなかったのに、なぜ入団したのかわからない。誰かに誘われたわけでもないし、入団を意識する出来事もなかった。陳腐な表現だが、何かに導かれたのだろう。そうとしか思えない。

かくして応援団生活が再開した。2リットルのペットボトルを2本飲んでも足りないぐらいの大汗をかきながらの野球応援。太鼓を叩いて手の皮が剥け、ペンを握ることもできなくなる。応援で声を出しすぎて声が枯れる。応援が終わった後は、ベツドに倒れこんで動けない…。

「がんばっている人を応援したい」。それでも応援団を4年間続けた原動力は、いたってシンプルな気持ちだった。応援するには、相手よりも練習を積み重ね、心にも体にも気合を入れる必要がある。厳しい練習を繰り返すのは、自分の声を相手に届けるため。自分のためではなく、がんばっている人のために鍛えるのだ。

逆に自分が、がんばっている姿に励まされることもあった。一生懸命な姿を見ていると、疲れた体に元気が戻ってくる。応援とは、励まし合うものでもあると知った。

応援団生活が終わって、他人に興味がなかった自分は、他人を応援する自分になった。大学で何を学んだか？ 自信を持って答えられる。俺の学んだことは「応援団という哲学」だ。



大学サークル会館の応援団室⇒

【自分が楽しむ】 山口新聞 2016年5月26日掲載分

「自分が楽しむ」。鹿野を応援するフリーペーパー「えーる！」を作る時、これだけは忘れないようにしている。

五月二十一日に催された「いっておかえり 鹿野市」の取材をした時も、まずは自分が楽しむことから始めた。スタッフから鹿野茶の説明を聞き、ふるまわれたお茶を飲んで、お茶の苦みを味わった。お茶を飲みながら、名前も知らない人からお茶のうんちくを聞いて、なるほどとうなずく。会場の写真を撮っていると、中学校時代の友人と再開して「元気でやってるか？」と声を掛け合う。小学校の出店を見ていると、自分の横を「お店に来てくださーい！」という元気な声を張り上げる小学生が走っていく。取材そっちのけでイベントを楽しんでいると、気が付けば半日近く会場に滞在していた。フリーペーパーを作ると言う「すごいね」と言われるが、自分が好きなものを知ってもらいたいだけだ。あくまで自分の中では、これは趣味なのである。

必要な写真を撮り、スタッフに話を聞くだけでも、一応記事にはなる。しかし、自分がイベントを楽しみ、参加者として感じたことがなければ、生きた記事ができない。

自分の言葉が出てこない、うわべだけの平凡な記事にしかないのだ。

まず楽しむ。好きなことは応援したくなる。応援したくなるから、鹿野に「えーる！」を送ることができるのだ。



ふるまわれた鹿野茶⇒

【後輩へのエール】 山口新聞 2016年6月2日掲載分

自分は毎週土曜日、北九州市立大学応援団のコーチとして母校を訪れている。

応援団にできる恩返しはないか。そう考えていたとき、指導者不在の中で練習する後輩の話を目にした。当時の団員は、一年生一人だけ。彼が一人前に成長するまで、指導を続けようと決意した。

毎週とはいかないが、周南市から北九州市まで足を運んでの練習指導が始まった。たった一人の後輩は、腕立て伏せの途中でへたばるし、応援団の命である声も小さかった。この調子で大丈夫だろうか？ 素直な感想だった。

しかし、日々の練習に耐え、春秋の野球応援を経験し、彼は成長した。頼りなかった腕も太くたくましくなり、エールを切る声は野太く、母校のキャンパス中に響き渡るようになった。後輩を従えて指示をする姿は、見違えるほどしっかりしている。もう指導者の心配をすることはない。コーチとして伝えられることは少なくなってきたが、彼が安心して応援団を率いる姿を見守ってられるようになった。

現在、応援団は、他部からの助っ人を含めて10名を超す大所帯だ。人数不足で埃をかぶっていた団旗を、ついに掲げることができた。太鼓を叩く団員も確保できた。指導を始めた昨年の2月に比べ、なんと応援団らしくなったことか。

たのもしく成長した第59代目北九州市立大学応援団へ、心からエールを送りたい。



野球応援にて、エールを送る後ろ姿⇒

【熱くなる趣味】 山口新聞 2016年6月9日掲載分

今、自分が熱くなる趣味といえば、フリーペーパーの取材、応援団のコーチ。そして、知人の主催するイベントに参加することだ。お客ではなく、イベントを裏で支えるスタッフとして、である。

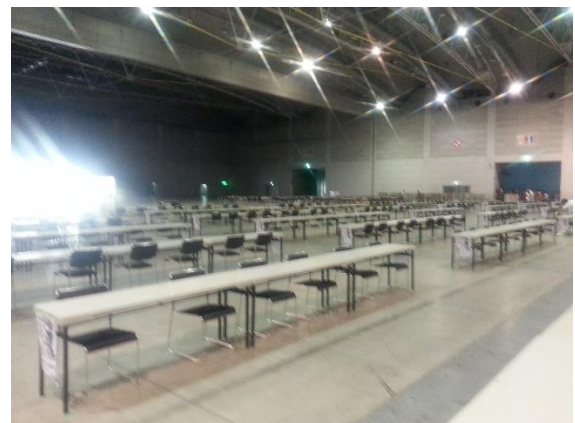
会場は県外。前日から足を運び、設営をする。長机を400や500ではきかないほど引っ張り出し、パーテーションも100枚以上使う。これをすべて人力で運び、並べていく。半日程度なのに、冬でも着替えが必要になるほど大汗をかく作業だ。

当日も仕事に行くより早い時間に会場に集合する。場内の最終チェックに走り回り、開場を待つ千人近い人を並ばせるのに大声を張り上げる。開場を迎えれば、安全確認やトラブル対応のために駆け回る。一日はあっという間に過ぎていく。撤収作業を迎える頃には歩くのも億劫になるほどへとへとになっている。

帰り際、参加者が「楽しかったです」「また来ます」と声をかけてくれる。一日中走り回った体に沁みる言葉だ。作り上げたイベントを楽しんでもらえた。くたくたになっても、またスタッフをやりたくなってくる。

週末をイベント協力で費やせば休みはなくなる。それでも、イベント成功のため汗を流すスタッフの力になりたい。がんばるスタッフの皆を応援したい…。そう思ったとき、心の底から熱くなるのを実感する。

自分が熱くなる趣味、「応援」である。



現在準備中……⇒

【自分の集大成】 山口新聞 2016年6月16日掲載分

鹿野のがんばっている人を応援したい。そんな思いから、鹿野を紹介するフリーペーパー「えーる！」を作り始めた。

フリーペーパーを作るにあたり、悩んだのは配布方法だ。鹿野は高齢化地域である。置いておくだけでは誰も手に取ってくれない。そうだ、新聞の折り込みチラシにしてもらおう。取りにきてもらえないなら、こちらが届ければいい。この考えは見事に当たった。今もこの方法で発行を続けている。

ではなぜ自分はこの形を選んだのだろうか？ 高校時代には、応援団だけではなく文芸部にも所属していた。もともと趣味で小説を書いていたから、入部は自然なことだった。しかし文芸部で発行する文芸誌はただ原稿を書くだけでできるものではない。体裁を整え、印刷して本にしなければならない。印刷費捻出のため、今まで行ったこともない店に入って、スポンサーになってくれと交渉をする。断られてもめげずに歩き続け、何十というスポンサーを集めて本を出版した。

社会人になって、ずっと誰かを応援する方法を探していた。趣味が原稿を書く力になった。文芸部の活動が、知らない相手に飛び込んでいく度胸をくれた。今までの経験が、応援したいという心を後押ししてくれたのだ。

フリーペーパーの発行をして、がんばっている人を応援する。それはまさに、自分の集大成なのである。

フリーペーパー「えーる！」の1ページ⇒



【鹿野にエールを】 山口新聞 2016年6月23日掲載分

「えーる！」は、鹿野を応援する地域情報誌だ。がんばっている人やイベント取材し応援するだけでなく、鹿野の自然も取材して応援している。

首をかしげる方もいらっしゃるだろう。がんばっている人を応援するというのはわかるが、鹿野の自然を応援するとは、いったいどういうことなのかと。

鹿野には命があふれている。底が見えるほど澄んだ水の中には、川魚が何匹も泳いでいる。田んぼを見ればアメンボが浮かんでいるし、カエルたちはうるさいほど鳴き続けている。軒下には燕がやってきて巣をつくり、大きく育ったひなが顔を出して、親から餌をねだっている。キジやタヌキといった、山で暮らす動物たちの姿を見かけることもある。夕方には、カナカナというヒグラシの鳴く声がどこからともなく聞こえてくる。夜になって川沿いを歩けば、わざわざ探さなくても、視界いっぱいに緑色の光があふれるほど、たくさんの蛍を見ることができる…。

都会にはないものがある鹿野をみんなに知ってほしい。一度離れてみるまで自分も気づかなかった、鹿野が持つ自然に目を向けてほしい。そして、豊かな自然を好きになって、鹿野の応援団になってほしい。自分もその応援団の1人として、好きなものをもっと知ってもらいたいし、応援したいのだ。

豊かな自然と命あふれる鹿野へ、心からエールを送りたい。



鹿野の風物詩、ホタル⇒



【押忍道心】 山口新聞 2016年6月30日掲載分

「応援」をテーマに書き続けてきたコラムも、いよいよ最終回である。この2カ月間を思い起こす。応援団の後輩を思い出し「こいつを書きたい」と思った。書いた文章が気に入らず、母に何度も記事を読んでもらい文章を練り直した。友人に原稿を見せて、深夜まで話し合ったこともある。

コラムを書いたのは確かに自分だ。しかしその自分を支えてくれたのは後輩であり、母であり、友人だった。皆がいたから最後まで書き上げることができた。

以前コラムに書いた、フリーペーパー作成、イベントスタッフ参加もそうだ。がんばっている人を応援し、作り上げたものを見て「がんばってるね」「楽しみにしている」と声をかけてくれる人がいた。その一言があるからがんばることができる。活動を続けていくことができるのだ。

大学応援団の応援歌に「積極 忍耐 押忍道心」という一節がある。応援するときの心構え、積極的な姿勢や、苦難に耐え忍ぶ心を指すものだ。「押忍」は、かつて青年武士の間で、互いを励まし合うあいさつとしても使われていた。応援の根底にある押忍道の精神とは、積極性や忍耐力、すなわち自分の心構えだけではない。互いに励まし合うこと、つまり相手がいてこそそのものであることを示している。応援とは決して一方通行ではないのだ。

押忍道心。応援の神髄は、ここにあり。